

昭和五十六年十二月七日制定

日本剣道形解説書

附・大日本帝国剣道形 増補加註

指導上の留意点

審査上の着眼点

作成の経緯

解説書のできるまで

解説書にもとづく意志統一

全日本剣道連盟

日本剣道形解説書作成の趣旨

全日本剣道連盟が正式に採用している日本剣道形は、旧大日本武徳会が大正元年十月制定し、大正六年九月加注、さらに、昭和八年五月に加注増補したものを原本としている。

しかし、その原本の文章表現や用語、かなづかい等が今日では難解になり、それが剣道形の修練の障害の一つにもなっているのではないかと思われる。

さらに、原本をよく検討してみると、明らかに誤植ではないかと思われる点がある。しかし、現在では、これを究明する方法がないので、原本は原本として尊重し、訂正することなく、それらの点の解釈を統一することにした。

このような観点から、今回原本をやさしい文体に書き改めて、わかり易くするとともに、全日本剣道連盟の統一見解として作成し、形の修練に役立てようとするものである。

しかしながら、原本については剣道修業の段階に応じて、これに親しみ、先人が究めたすぐれた剣の理法の真髄に触れて、格調高い剣道を体得してもらいたいと思う。

解説の要領

一、昭和四十一年七月、日本武道館で行われた審判・形研究会、ならびに、昭和五十二年二月に開催された高段者研究会の申し合わせに基づき、旧大日本武徳会が制定した大日本帝国剣道形の昭和八年五月加注増補したものを原本として、出来るだけこれに従った。

二、すでに、過去の研究会等で統一見解として示された事項については、これに従った。

三、だれでも独習できるようにやさしい文体に書き改めた。しかし、専門用語は「ふりがな」を付けたり、そのまま残すことにした。四、「注」を本文に加えて記述を一本化した。ただし、所作の説明を主としたので、所作に直接関係のない点については「注」として別掲にした。

五、従来慣習的に伝承してきたものと、新たな統一見解を記載した。

六、原本では、中段と晴眼の二つを使っているがこれを中段に、また上段は、諸手左（右）上段の名称に統一した。

七、原本の第一本、第二本を一本目、二本目とした。

八、方向の記述は、対象（相手、あるいは仕太刀等）のないものは、自己を基準とした。

九、原本の「説明」はそのまま掲載した。

十、末尾に参考として日本刀および拵こしらの各部名称を添付した。

日本剣道形解説書

立会

一、立会前後の作法

立会の前後には、刀（木刀）を右手に提げ、⁽¹⁾下座で約三步の距離で向かい合つて正座し、刀を右脇に刃部を内側に、⁽²⁾鐙を膝頭の線にそろえて置き、互いに礼をする。

注 (1) 下座の位置は、特に限定しないが、中央が望ましい。

打太刀、仕太刀の位置については、必ずしも打太刀を上座に向かつて、右側にしなくてもよい。

(2) 小太刀は太刀の内側に置く。

次に、刀を右手に刃部を上⁽¹⁾に柄を前に切先を後ろさがり⁽²⁾にして提げ、立会の間合に進む。立会の間合は、およそ九歩とする。

注 (1) 天覧、台覧の場合は、最初刃部を下にして、柄を後ろにして、切先を前さがりにして、右手で栗形のところを握つて提げる。

(2) 演武する場合の小太刀を置く位置は、仕太刀の立会の位置から右（左）後方約五歩のところに、刃部を内側にし、演武者と平行に置く。

一、打太刀、仕太刀、刀を提げ、立礼をして始める。

大日本帝国剣道形 増補加註

大正元年十月制定
大正六年九月加註
昭和八年五月加註増補

（○）内ニ数字ヲ入レタルハ寫
真ノ番号ナリ彼此对照ヲ要ス

立会

一 打太刀仕太刀剣ヲ提ケ立礼ニ始ム

（註）立会ノ前後ニハ刀（又ハ木劍）ヲ右手ニ提ゲ下座ニテ約三步ノ距離ニ相對シ正坐シ刀（又ハ木劍）ヲ右脇ニ置キ（刃部ヲ内ニ鐙ヲ膝頭ノ線ニ置ク）(1)互ニ礼ヲナスモノトス(2)

次ニ刀ヲ右手ニ提ゲ刃部ヲ上ニ柄ヲ前ニ切先ヲ後下リニシテ立会ノ間合ニ進ム

立会ノ間合ニ進ミタル後先ツ正座ニ向ヒテ敬礼ヲ為シ(3) 後相互ニ礼ヲ為シ(4) 刀ヲ左腰ニ帯ヒ左手ヲ鐙元ニ添ヘ拇指ヲ鐙ニ懸ク（木劍ノ時ハ左手ニ持換フルト同時ニ拇指ヲ鐙ニ懸ケ腰ニ執ル）
拇指ヲ鐙ニ懸クル要領ハ鯉口ヲ切り尚刀（又ハ木劍）ヲ相手ヨリ抜カレザル心持ニテ拇指ノ指紋部ノ所ニテ鐙ノ上ヲ輕ク押フ天覧台覧ノ場合ハ最初刃部ヲ下ニ柄ヲ後ニ切先ヲ前下リニシテ右手ニ刀ノ栗形ノ所ヲ握リテ提ク

一 立間合ノ距離ハ凡ソ九歩トス

但シ互ニ大キク三步ツ、踏ミ出シ(5) 蹲踞シツ、劍ヲ抜き合ハス(6) 其ノ構ハ稍々右足ヲ踏ミ出シ

立会の間合に進んだのち、まず上座⁽¹⁾に向かつて礼をし、次に、互いの礼をしてから、刀を左腰に差し、左手を鐙元^{つばもと}に添えて親指を鐙⁽³⁾にかける。木刀のときは、左手に持ちかえると同時に、親指を鐙にかけて腰にとる。

注 (1) 上座の礼は、上体を約三十度、前に傾けて行う。

(2) 互いの礼は、上体を約十五度、前に傾けて、相手に注目して行う。

(3) 親指を鐙にかける要領は鯉口を切ることに、刀を相手から抜かれないようにする心持ちで親指の指紋部のところで鐙の上を軽く押さえる。

次に、互いに右足から大きく三歩踏み出して、蹲踞^{そんきよ}しながら刀を抜き合わせる。蹲踞は、やや右足を前にして右自然体となる程度とし、立ち上がって中段の構えとなり、剣先⁽²⁾を下げ、互いに左足から小さく五歩ひき、いったん中段の構えになり、次の形の構えになる。

注 (1) 打太刀、仕太刀ともに足さばきはすり足で行う。

(2) 剣先を下げるとは、構えを解くことである。(以下同じ)

剣先を下げる要領は、自然に相手の左膝頭から、三ないし六センチ下、下段の構え程度に、右斜め下に下げる。このとき剣先は相手の体から、わずかにはずれぬぐらいにひらき、刃先は、左斜め下に向くようにする。(小太刀もこれに準ずる)

小太刀の場合は、太刀に準じて行うが、構える場合は抜き合わせると同時に、左手⁽¹⁾を腰にとり、剣先を下げると同時に左手を下ろす。

注 (1) 左手を腰にとる要領は、刀の場合は栗形の部分を親指を前にして軽く押さえ、木刀の場合は親指を後ろに、四指を前にして腰にとる。

右自然体トナルヲ度トシテ立上リ剣尖ヲ下ケ

(註) 此禮剣尖ハ自然ニ相手ノ左膝頭ヨリ二三寸下トシテ立上リ、互ニ左足ヨリ少サク

五歩退キ 其條項ノ構 ヲ為ス

一最終ノ礼ハ最初ニ同シ

(註) 最終ノ礼ハ先ツ相互ノ礼ヲ為シ次ニ正座ニ向ヒ敬礼シテ退場スルヲ順トス

小太刀ハ太刀ニ準ス但シ構フル場合ハ抜き合ハスト同時ニ左手ヲ腰ニ執リ(太刀ノ場合ハ栗形ノ部分ヲ軽く握リ拇指ヲ前ニシ)木劍ノ場合ハ拇指ヲ後ニス) 剣尖ヲ下クルト同時ニ左手ヲ下ス(4)

一、最後の礼は最初の礼と同じである。

最後の礼は、まず互いに礼をし、次に上座に向つて礼をして退場する。⁽¹⁾

注(1) 上座の礼が終わると、最初に下座で行つた座礼の位置にもどり、互いに礼をして退場する。

掛 声

一、打太刀「ヤー」、仕太刀「トー」の二声とする。

刀

一、正式には刀(刃引)を用いる。

一、練習には木刀を用いる。⁽¹⁾ その寸法は左のとおりである。

総尺 太刀三尺三寸五分(約一〇二センチ) 柄八寸(約二四センチ)

小太刀一尺八寸(約五五センチ) 柄四寸五分(約一四センチ)

注(1) 太刀とは大刀、小太刀とは小刀のことである。

懸 声

一 ヤー、トーノ二声トナス事

剣

一 正式ニハ白刃(註)刃引ヲ用フ

一 練習ニハ木剣ヲ用フ其ノ寸法左ノ如シ

総尺三尺三寸五分

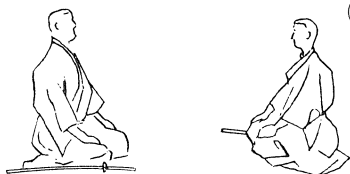
但、切羽ノ間五分

柄 八寸

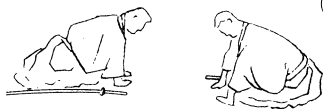
小太刀一尺八寸

柄四寸五分

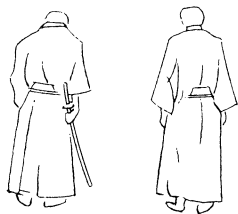
(1)



(2)



(3)



天覧台覧

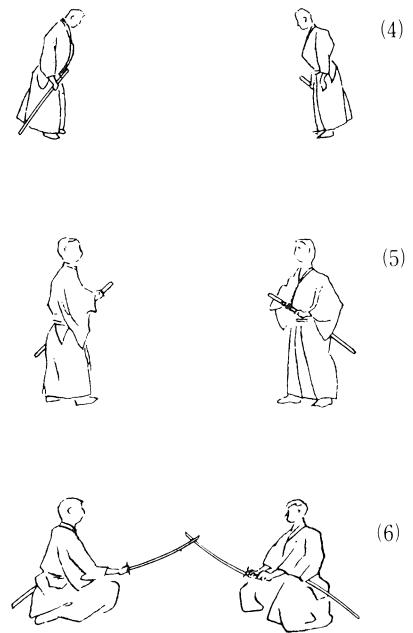
太刀の形 七本

一本目

打太刀は諸手^{もろて}左上段、仕太刀は諸手右上段で、打太刀は左足、仕太刀は右足から、互いに進み、間合に接したとき、打太刀は機を見て右足を踏み出し、仕太刀の正面を打つ⁽²⁾。

- 注 (1) 仕太刀の柄もろともに打ち下ろす気構えが大切で、打ち下ろした剣先は、下段の構えよりもやや低くなる。
- (2) 打つということは、切るという意味である。(以下同じ)

仕太刀は左足から体を少し後ろに自然体でひくと同時に、諸手も後ろにひいて、打太刀の剣先を抜き、右足を踏み出し、打太刀の正面を打つ。打太刀が剣先を下段のまま送り足で一步ひくので、仕太刀は、十分な気位で打太刀を押しながら、剣先を顔の中心につけ、打太刀がさらに一步



第一本

打太刀諸手左上段仕太刀右諸手上段ニテ(7)互ニ進ミ(打太刀左足ヨリ仕太刀右足ヨリ)間合ニ接スルヤ

打太刀ハ機ヲ見テ右足ヲ踏ミ出シ仕太刀ノ正面ヲ打ツ

仕太刀ハ左足ヨリ体ヲ少シ後方ニ披キ

打太刀ノ正面ヲ打チ(8)左足ヲ踏ミ出シ上段ニ冠リ残心ヲ示ス

打太刀ノ正面ヲ切り充分ナル気位ヲ

下段ヨリ剣尖ヲ中段ニ着クルヲ仕太刀モ同時ニ上段ヲ下ロシ相中段トナリ剣尖ヲ下ケ(11)元ニ復ス

ひくと同時に、左足を踏み出しながら、諸手左上段に振りかぶり残心⁽³⁾を示す。

注 (1) 送り足で二歩ひくことになる。そのときの歩幅は、仕太刀との間合に
よって大小があることに注意する。

(2) 顔の中心とは両眼の間をいう。

(3) 一本目から七本目まで形（上段または脇構え）の示されていると、いない、にかかわらず、十分な気位で残心を示すことがたいせつである。

打太刀が剣先を下段から中段につけ始めるので、仕太刀も同時に左足をひいて諸手左上段を下ろし、相中段となり、剣先を下げて元の位置にかえる。

注 (1) 立会の間合の位置である。（以下同じ）

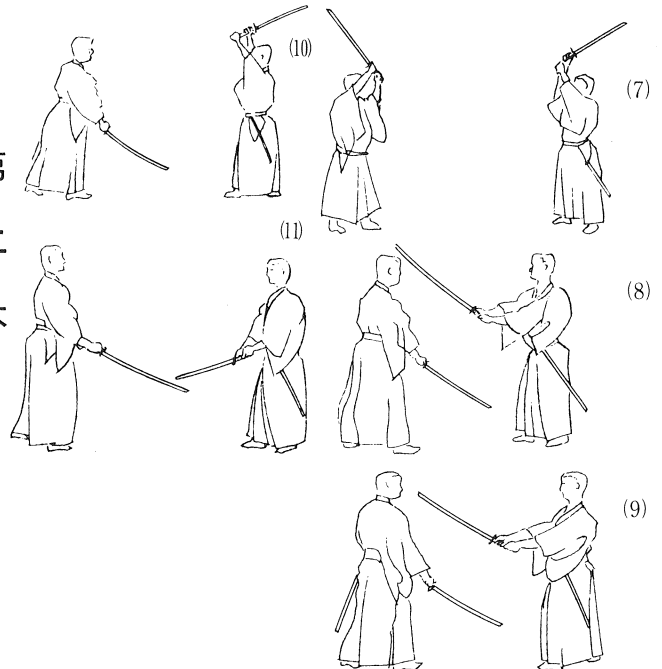
二本目

打太刀、仕太刀相中段で、互いに右足から進み、間合に接したとき、打太刀は機を見て仕太刀の右小手⁽¹⁾を打つ。

注 (1) 大技で仕太刀の右小手の位置より、わずかに低く打つ。

仕太刀は、左足から右足をともなって左斜め後ろにひくと同時に、剣先を下げて、打太刀の刀の下で半円をえがく心持ちで打太刀の打ち込んでくるのを抜いて、大きく右足を踏み出すと同時に打太刀の右小手を打つ。

第二本



打太刀仕太刀相中段ニテ互ニ進ミ（註）打仕共ニ
互ニヨリス間合ニ接ス
ルヤ打太刀ハ機ヲ見テ仕太刀ノ右籠手ヲ打ツ仕太刀
ハ左ニ左足ヲ披キ（註）左足ヨリ左斜後ニヒキテ同時ニ太刀ハ打太刀ノ刀
ノ下ニ半円ヲ画ク心持ニテ其切込ミ兼テ抜ラフ大
キク右足ヲ踏み出シ（註）左足モ右足ニ連レ
テ一致ノ動作ヲ要ス同時ニ右籠手ヲ打
チ（註）打太刀ハ左足ヨリ仕太刀ハ右足
ヨリ刀ヲ抜キ合ハシタル位置ニ帰ル（13）相中段トナリ 剣尖ヲ下ケ元
ニ復ス

注 (1) 右足を踏み出すとき、左足も進める。

打太刀は左足から、仕太刀は右足から十分な気位で残心を示しながら、相中段になりつつ、刀を抜き合わせた位置にもどり、剣先を下げ、元の位置にかえる。

注 (1) 形には表さない残心なので、特に十分な気位がたいせつである。

三本目

打太刀、仕太刀相下段で互いに右足から進み、間合に接したとき、互いに気争いで自然に相中段になる。そこで打太刀は機を見て、刃先を少し仕太刀の左に向け、右足から一步踏み込みながら、鎧ですり込み、諸手で仕太刀の水月を突く。仕太刀は、左足から一步大きく体をひきながら、打太刀の刀身を物打の鎧で軽く入れ突きに萎やすと同時に打太刀の胸部へ突き返す。

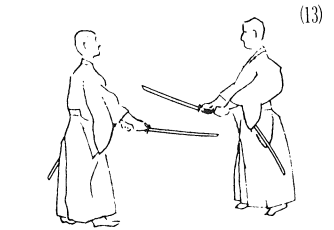
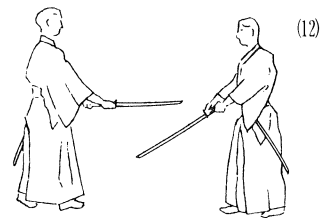
注 (1) みずおちである。

(2) 体をひかないで、手だけひくときは、突き返すときの間合が正確でなくなるので、打太刀の進む程度に応じてひき方に十分注意すること。

(3) 仕太刀が打太刀の剣先を萎やす程度は打太刀の剣先が体はずれるぐらいにする。なお、仕太刀が萎やすときは刃先は右下を向き、突くときは真下を向く。

打太刀の突きを萎やして仕太刀が入れ突きに突き返す場合は、打太刀の突く刀身と、仕太刀の萎やし入れ突きに返す刀身の縁が切れないように行うことがたいせつである。

打太刀はこのとき右足を後ろにひくと同時に、剣先を仕太刀の刀の下から返して、諸手をやや伸ばし、左自然体の構えとなり、剣先は仕太刀



第三本

打太刀仕太刀相下段ニテ互ニ右足ヨリ進ミ間合ニ接スルヤ(14)打太刀ハ機ヲ見テ剣刃ヲ少シ仕太刀ノ左ニ向ケ諸手ニテ仕太刀ノ胸部ヲ突ク(15)

仕太刀ハ之ヲ入レ突キニ流スト同時ニ(註)流スハ、打太刀ノ胸部ヲ突ク(16)

尖ヲ右ニ押ヘ(註)打太刀ハ右足ヲ後方ニ引クト同時ニ剣尖ヲ仕太刀ノ刀ノ下ヨリ返シ諸手ヲ稍々伸シテ左自然体構トナリ剣尖ハ打太刀ノ咽喉部ニ刺ス

時ニ又左ニ剣尖ヲ押ヘルヲ(註)左足ヲ引クト同時ニ剣尖ヲ下ヨリ返シ又鑢ス仕太刀ハ左足ヨリ位詰ニテ稍々二三歩右足ヨリ進ミ(18)後相中段トナリ

(註) 此時仕太刀ノ剣尖ハ充分ニ突キノ氣勢ヲ以テシ先ヲ左足右足踏ミ出シテ位詰ニシ數歩小足ニ稍々早ク進ム此際剣尖ハ胸面ヨリ次第二上テ中面ノ中心ニ着ク然ル後打太刀右足ヨリ仕太刀左足ヨリ相中段トナリツ、刀ヲ抜キ合シタリ

剣尖ヲ下ケ元ニ復ス

の咽喉部につけて仕太刀の刀を物打の鎧で右に押さえる。

注 (1) 右足のひき方には注意して正確に行うことがたいせつである。

仕太刀は、さらに突きの氣勢で左足を踏み出し、位詰に進むので、打太刀は左足をひくと同時に、剣先を仕太刀の刀の下からまわして返し右自然体の構えになり、物打の鎧で押さえるが仕太刀の気位に押されて剣先を下げながら左足から後ろにひく。仕太刀は、すかさず右足から二、三步小足にやや早く位詰に進み、剣先は胸部から次第に上げていつて顔の中心につける。その後、打太刀は右足から、仕太刀は左足から相中段になりながら刀を抜き合わせた位置にもどり、剣先を下げて元の位置にかえる。

四 本 目

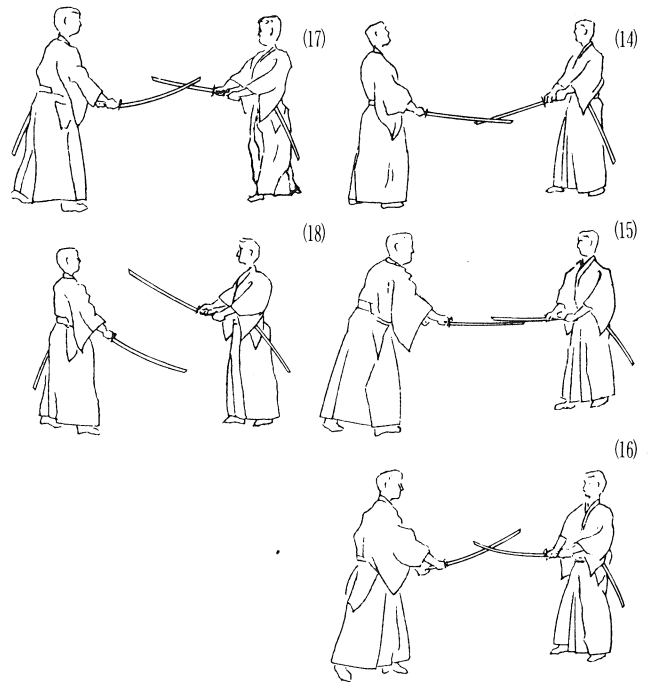
打太刀は八相の構え、仕太刀は脇構えで、互いに左足から進み間合に接したとき、打太刀は機を見て八相の構えから、諸手左上段に、仕太刀もすかさず脇構えから、諸手左上段に変化して、互いに右足を踏み出すと同時に、十分な氣勢で相手の正面に打ち込み、切結んで相打となる。

注 (1) 歩幅は、やや小さく三步進む。

(2) 諸手左上段に振りかぶる程度は、両腕の間から相手の体が見えるぐらいである。

(3) 相手の正面に打ち込むときは、諸手を十分伸ばすこと。

四本目は大技を示したものであるから、大きく伸びるようにするのがよい。それだから間合のとりにかたには、特に注意しなければならない。



第 四 本

打太刀八相仕太刀脇構ニテ互ニ左足ヨリ進ミ間合ニ接スルヤ(19)打太刀ハ機ヲ見テ八相ヨリ仕太刀ノ正面ヲ打ツヲ以テ相打トナリ

(註) 打仕共充分ナル氣勢ヲ以テ各々其ノ構ヨリ突キテ上段ニ冠右足ヲ踏ミ出スト同時ニ切込ミテ切結ビ上段ニ冠ル度合ヲ面觸ノ間ヨリ相手ノ体ノ見エルヲ度トス又切込ムトキハ諸手ヲ充分ニ伸バシ総シテ第四本ハ大業ヲ示シタルモノナレバ大キク伸ビラ可トスルヲ放シ度合ノ度合ハ最モ注意ヲ要ス切込ミテ後ハ相互ノ刀身觸ラ削ル如クシテ自然中段トナル(體其ノ間双方共ニ同等ノ氣位ヲ要ナリ)

打太刀ハ(註) 機 劍刃ヲ少シ仕太刀ノ左ニ返シ右足ヲ進ムルト同時ニ(註) 左 諸手ニテ仕太刀ノ胸部ヲ突ク仕太刀ハ左足ヲ左ニ転ス(註) 此際右足ハ左足ニ伴ヒ右ノ後方ニ転ス

(1) 相打となつてからは、双方同じ氣位で互いの刀身が鑄を削るようにして、自然に相中段となり、打太刀は機を見て刃先を少し仕太刀の左に向け、右足を（左足もともなつて）進めると同時に、諸手で仕太刀の右肺を突く。

注 (1) 相打になつた時、間合が近すぎる場合は、打太刀がひいて間合をとる。

仕太刀は、左足を左前に、右足をその後ろに移すと同時に大きく巻き返して打太刀の正面を打つ。

注 (1) 左拳を頭上こぶしに上げると同時に刃先を後ろにして巻き返す。

打太刀は左足から、仕太刀は右足から、十分に残心の氣位を示しながら相中段になりつつ、抜き合わせた位置にもどり、劍先を下げて元の位置にかえる。

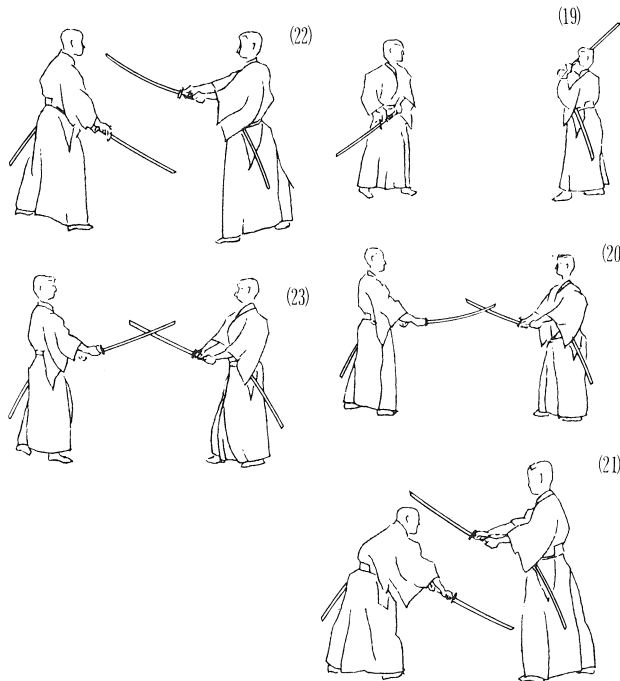
注 (1) 二本目と同じように形に表さないので、十分な氣位で示すことがたいせつである。

構えの説明

八相の構え

諸手左上段の構えから、そのまま右拳を右肩のあたりまで下ろした形で、刀をとる位置は、鑄を口の高さにし、口からほぼ拳一つ離す。構えるときは、左足を踏み出し、刀を中段から大きく諸手左上段に振りかぶる氣持で構える。刃先は相手に向ける。

ルト同時ニ捲キ返シト 打太刀ノ面面 ヲ打チ(21)相
晴眼トナリ(22)(23)劍尖ヲ下ケ元ニ復ス



構ノ説明(19)

八相

左上段ノ構ヨリソノマ、(刀ヲ執リタルノ形)

右拳ノ右肩ノ辺マデ下リタル形註 刀ヲ執ル位置ハ鑄ヲ口ノ高サニシテ口ヨリ略々一

ナツ

脇構え

右足を後ろにし、左半身となり、刀を右脇に剣先を後ろにし、刃先は右斜め下に向ける。剣先は下段の構えより少し下げた位置にとる。構えるときは、右足をひきながら、刀を中段から大きく右脇にとる。特に刀身が相手から見えないように構えなければならぬ。

五本目

打太刀は諸手左上段、仕太刀は中段で、打太刀は左足から仕太刀は右足から、互いに進み、間合に接したとき、打太刀は機を見て右足を踏み出すと同時に諸手左上段から、仕太刀の正面を打つ。

注 (1) 剣先を左拳につけ、刃先は下を向く。

(2) 顎まで切り下げ、心持ちで打ち下ろす。

仕太刀は、左足からひくと同時に左鑓で打太刀の刀をすり上げ、右足を踏み出して正面を打ち、右足をひきながら諸手左上段に振りかぶって残心を示す。

注 (1) すり上げは両腕の間から相手の体が見える程度に行う。なお、払い面にならないように注意する。

(2) 残心は、一本目と同じように剣先を打太刀の顔の中心につけてから上段にとる。

打太刀が剣先を中段につけ始めるので、同時に仕太刀も左足をひいて剣先を中段に下ろし、相中段になる。打太刀は左足から、仕太刀は右足から小足三步で、刀を抜き合わせた位置にもどり、剣先を下げて元の位置にかえる。

脇構

右足ヲ後ニ左半身トナリ刀ヲ右脇ニ刀尖ヲ後ニシハ右斜下ニ向ケ刀尖ハ下段ヨリ少シ下リシ位置ニトリタル形

(注) 構アル時ハ右足ヲ引キツ、刀ヲ中段ヨリ大キク右脇ニ執ル時ニ刀身ノ相手ヨリ見えザルヤウ構フベキナリ

第五本

打太刀左諸手上段仕太刀晴眼ニテ互ニ進ミ(打太刀ハ左足ヨリ仕太刀ハ右足ヨリ)間合ニ接スルヤ(24)打太刀ハ機ヲ見テ右足ヲ踏ミ出スト同時ニ諸手上段ヨリ仕太刀ノ正面ヲ打ツ仕太刀ハ其ノ劍ヲ摺リ上ケ(25)打太刀ノ正面ヲ打チ(26)

(注) 右足ヨリ引クト同時ニ鑓ニ差スニテ摺リモケ(両腕ノ間ヨリ相手ノ体ヲ充分見ユルヲ要ス)右足ヨリ踏ミ

出シ正座 右足ヲ引キ左上段ニ冠リ残心 ヲ示

(注) 第一本ノ残心ニ準ス

ス(27)打太刀ハ劍尖ヲ晴眼ニ着クルヲ以テ仕太刀モ左

足ヲ引キ劍尖ヲ晴眼ニ下ロシ相晴眼トナリ(28)

太刀右足ヨリ小足三步ニテヲ抜き合タル位置ニ構ル

劍尖ヲ下ケ元ニ復ス



六 本 目

打太刀は中段、仕太刀は下段で、互いに右足から進み、間合に接したとき、仕太刀は機を見て下段から打太刀の両拳の中心を攻める氣勢で、中段に上げ始めるので、同時に打太刀も、これに應ずる心持ちでやや剣先を下げて、仕太刀の刀と合おうとする瞬間、右足をひいて諸手左上段に振りかぶる。

注 (1) 仕太刀の氣勢を押えることができないので上段に構える。

仕太刀はすかさず中段のまま大きく右足から（左足もともなつて）一歩進む。(1) 打太刀は、直ちに左足をひいて中段となり、機を見て仕太刀の右小手を打つ。(2)

注 (1) 進むとは攻め進むことで、進んだとき剣先を左拳につける。

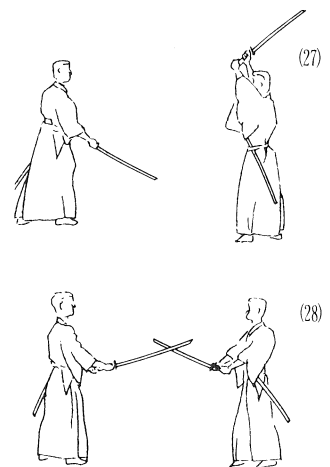
(2) 打太刀は攻められるので、ただちに中段になる。

(3) 小技の小手打ちである。

仕太刀はその刀を、左足を左にひらくと同時に、小さく半円を描く心持ちで、右鎧ですり上げ、右足を踏み出し、打太刀の右小手を打つ。(1)

注 (1) すり上げ小手が払い小手にならないように注意する。

第六本



打太刀晴眼仕太刀下段ニテ互ニ右足ヨリ進ミ間合ニ接スルヤ(29)仕太刀ハ機ヲ見テ下段ヨリ剣尖ヲ晴眼ニ着クル(30)ヲ打太刀ハ右足ヲ引クト同時ニ左上段ニ冠ル(31) (注) 仕太刀ハ下段ヨリ両拳ヲ中心ヲ攻ムル氣勢ニテ中段ニ擧グルヲ打太刀ハ之ニ応ズル心持ニテ額ヲ剣尖ヲ下ノ刀ト刀ト合セントスル利脚ニ上段ニ冠ル

ハ晴眼ノマ、大キク右足ヨリ一步進ム (注) 左足モ併セ

ハ直チニ晴眼トナリ (注) 右足ヲ引キテ中段トナル

手ヲ打ツ仕太刀ハ其ノ劍ヲ摺リ上クルト同時ニ左足ヲ左ニ披キ右足ヲ踏ミ出シテ右籠手ヲ打チ(32) (注) 左足ヲ左ニ踏ミ出シ上段ニ冠リ残心ヲ示ス(33)

打太刀ハ劍尖ヲ下ケ左足ヨリ引き (注) 左足ヲ大キク引き

ナリ (注) 打仕右足ヨリ刀ヲ扱キ合シタル位置ニ補ル

劍尖ヲ下ケ元ニ復ス

相晴眼ト

打太刀は劍先⁽¹⁾を下げて、左足から左斜め後ろに大きくひくので、仕太刀は左足を踏み出しながら、諸手左上段に振りかぶり残心を示す。

注 (1) このときの刃先は右斜め下に向く。

打太刀、仕太刀ともに右足から相中段になりながら、刀を抜き合わせた位置にもどり、劍先を下げて元の位置にかえる。

七 本 目

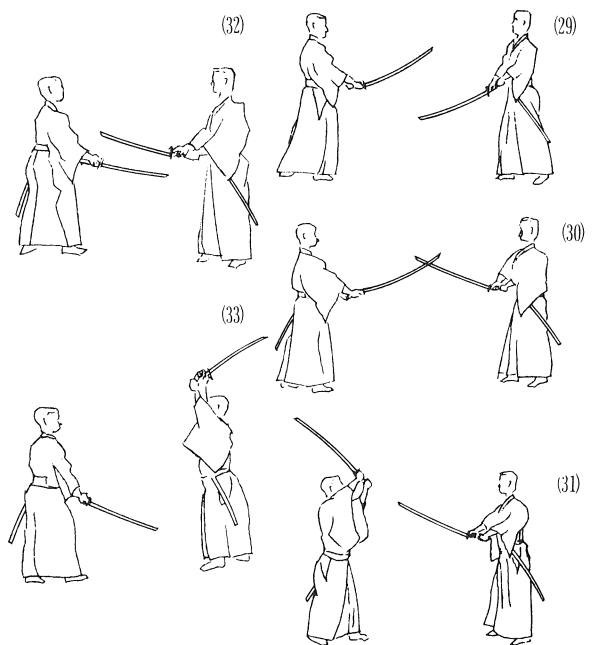
打太刀、仕太刀相中段で、互いに右足から進み、間合に接したとき、打太刀は機を見て、一步軽く踏み込み、刃先をやや仕太刀の左斜め下に向けて、鎧ですり込みながら、諸手で仕太刀の胸部を突く。仕太刀は、打太刀の進む程度に應じて、左足から体をひくと同時に、諸手を伸ばし、刃先を左斜め下に向け、物打の鎧で打太刀の刀を支える。⁽²⁾

注 (1) 突きの氣勢で諸手を伸ばす。

(2) 従って双方の劍先がやや上がることになる。

互いに相中段になり、打太刀は、左足を踏み出し、右足を踏み出すと同時に、体を捨てて諸手で仕太刀の正面に打ち込む。⁽²⁾

注 (1) 相中段になるとき、双方の氣位は五分五分であることが大切である。



第七 本

打太刀仕太刀相晴眼ニテ互ニ右足ヨリ進ミ間合ニ接スルヤ打太刀ハ機ヲ見テ仕太刀ノ胸部ヲ諸手ニテ突ク⁽³⁴⁾ 仕太刀ハ諸手ヲ伸ハシ

テ劍尖ニテ其ノ劍ヲ支ヘ 互ニ相晴眼トナリ打太刀ハ左足ヲ踏ミ出シ右足ヲ踏ミ出スト共ニ体ヲ捨テ諸手ニテ仕太刀ノ

正面ニ打込ム仕太刀ハ右足ヲ右ニ披キ左足ヲ踏ミ出シテ体ヲ摺リ違ヒナカラ 諸手ニテ

打太刀ノ右胸ヲ打チ右膝ヲ蹲踞脇構ヲナシ残心ヲ示

(2) このとき、打太刀の目付は一時仕太刀から離れるが、打ち終わって直ちに仕太刀に向ける。

仕太刀は、右足を右前にひらき、左足を踏み出して体をすれ違いながら諸手で、打太刀の右胴を打ち、右足を踏み出し左足の右斜め前に軽く右膝をついて、爪先を立て左膝を立てる。諸手は十分に伸ばし、刀は手とほぼ平行に右斜め前にとり、刃先は右に向ける。(2)その後、刀を返して脇構えに構えて、残心を示す。

注 (1) このとき、仕太刀の体は変化するが、目付は相手の体から離さないようにする。

(2) すれ違いに胴を打ち終わってから、節度をつけて残心に移る。

打太刀は、上体を起こして、刀を大きく振りかぶりながら、右足を軸にして、左足を後ろにひいて、仕太刀に向き合つて、剣先を中段につけ始めるので、同時に仕太刀も、その体勢から刀を大きく振りかぶりながら、右膝を軸にして左に向きをかえて、打太刀に向き合い、剣先を中段の程度につける。つづいて仕太刀が十分な氣勢で立ち上がってくるので、打太刀は左足から後ろにひきながら、相中段になり、さらに互いに縁が切れないようにして打太刀、仕太刀ともに左足から、刀を抜き合わせた位置にもどる。

七本目の場合は、いったん太刀の形が終わるので蹲踞して互いに刀を納めて立会の間合にかえり、立礼をして終わる。(1)

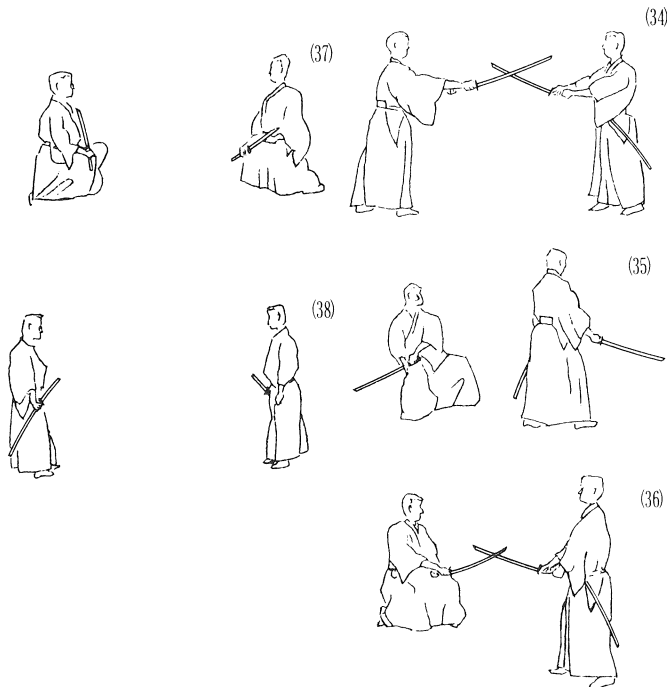
注 (1) つづいて、小太刀の形を行う場合、打太刀は、仕太刀が小太刀に取りかえる間、蹲踞して待つ。

シ (35) 註 仕太刀が右胴ヲ切ル場合ノ体ノ変化ハ右トシ左トシ右斜前方ニ軽く右膝ヲツキ左膝ヲ立て右爪先ヲ立ツ諸手ハ充分ニ伸シ刀ヲハ手ト略々平行ニ右斜前方ニトリ刃ヲ右ニ向ケ後刀ヲ反シテ脇ニトリス

後相晴眼トナリ

註 此際打太刀ハ上体ヲ起シ刀ヲ大きく冠リツ、体ヲ勢ヨリ刀ヲ大きく冠リツ、体ヲ転シテ打太刀ニ正面シテ剣先ヲ中段ノ度合ニツク圍ハ仕太刀ハ充分ナル氣勢ニテ立上ル故ニ打太刀ハ左足ヨリ後ニ引キツ、相中段トナリ更ニ相互ニ縁ノ切レザル様ニシテ刀ヲ抜き合シタル位置ニ掃リ

剣尖ヲ下ケ元ニ復ス 註 此場合ハ一旦終ルガ故ニ蹲踞シテ互ニ刀ヲ納メ立合ノ間合ニ戻リ立礼ニ終ル



説明

第一本 相上段ハ先ノ氣位ニテ互ニ進ミ先々ノ先ヲ以テ仕太刀勝ツノ意ナリ

第二本 相中段ハ互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀先々ノ先ニテ勝ツノ意ナリ

第三本 相下段ハ互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀先々ノ先ニテ勝ツノ意ナリ

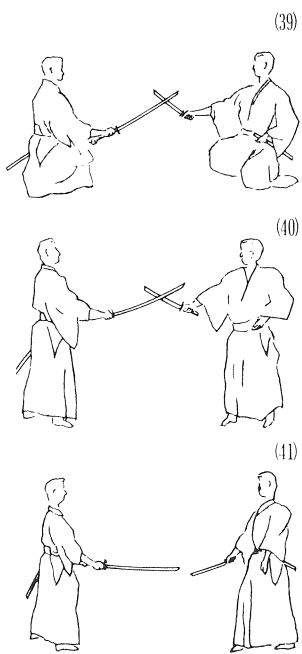
第四本 陰陽ノ構ニテ互ニ進ミ仕太刀後ノ先ニテ勝ツノ意ナリ

第五本 上段晴眼互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀先々ノ先ニテ勝ツノ意ナリ

第六本 晴眼下段互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀後ノ先ニテ勝ツノ意ナリ

第七本 相晴眼ニテ互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀後ノ先ニテ勝ツノ意ナリ

小太刀形三本 (打太刀長劍仕太刀短劍)



小太刀の形 三本（打太刀―太刀、仕太刀―小太刀）

一本目

打太刀は諸手左上段、仕太刀は中段半身の構えで、打太刀は左足から、仕太刀は右足から、互いに進み間合に接したとき、仕太刀が入身いりみになるうとするので、打太刀は右足を踏み出すと同時に、諸手左上段から、仕太刀の正面に打ち下ろす。

注 (1) 剣先をやや高く構える。

仕太刀は、右足を右斜め前に、左足をその後ろに進めて、体を右にひらくと同時に、右手を頭上へ上げ、刃先を後ろにし、左鎧で受け流して打太刀の正面を打ち、左足から一歩ひいて上段(1)にとって残心を示す。

注 (1) 上段にとるとき、剣先を顔の中心につける必要はない。

(2) 確実に正面を打ってから残心を示す。（反射的にはとらない）

その後、いっ(1)つたんその場で相中段になつてから、打太刀、仕太刀ともに、左足から刀を抜き合わせた位置にもどり、剣先を下げて元の位置にかえる。

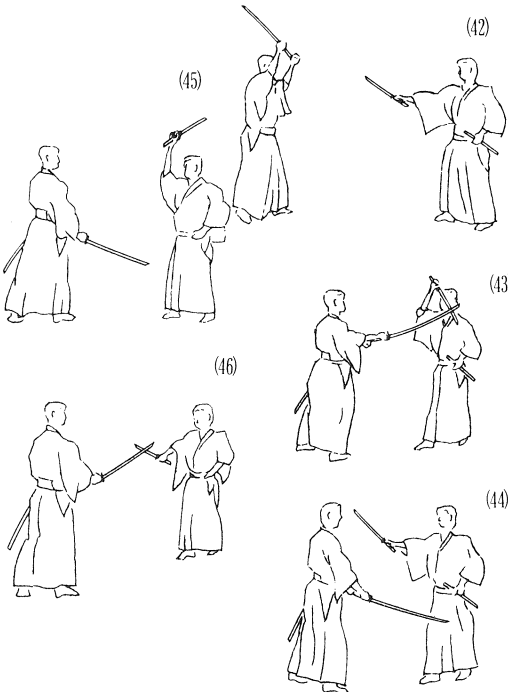
注 (1) 小太刀の一本目だけその場で相中段になる。

二本目

打太刀は下段、仕太刀は中段半身の構えで、互いに右足から進み間合(1)

第一本

打太刀上段（注）左 仕太刀晴眼（注）剣尖種と高 半身ノ構へ互ニ進ミ、（打太刀左足ヨリ仕太刀右足ヨリ）仕太刀入身トナル(42)ヲ打太刀ハ上段ヨリ仕太刀ノ正面ヲ打ち下ロス（注）間合ニ接スルヤ右足ヲ踏ミ出スト同時ニ上段ヨリ切り下ロス 仕太刀ハ体ヲ右斜ニ披クト同時ニ受ケ流シ(43)（注）此際右手ヲ頭上ニ挙ケルト同時ニ刃ヲ後方ニシ左脇ニ差表ニ受流ス 打太刀ノ正面ヲ打ち(44)（注）此場合左足ハ右足ニ伴フ 左足ヨリ一歩引キ上段ニ取り残心ヲ示シ(45)後相晴眼トナリ(46)（注）打仕共ニ左足ヨリリテ抜キ合ケル位段ニ留ル 剣尖ヲ下ケ元ニ復ス



第二本

打太刀下段仕太刀晴眼（注）剣尖種と高 半身ノ構へ互ニ右

に接したとき、打太刀は、守る意味で、下段から中段になろうとする瞬間、仕太刀は、打太刀の刀を制して入身になろうとするので、打太刀は、右足を後ろにひいて脇構えにひらくのを、すかさず、仕太刀が、再び中段で入身になって攻めてくるので、打太刀は脇構えから変化して諸手左上段に振りかぶり、右足を踏み出すと同時に仕太刀の正面に打ち込む。

注 (1) 剣先をやや低く構える。

(2) 上段に振りかぶる程度は、両腕の間から相手の体が見えるぐらいである。

仕太刀は左足を左斜め前に、右足をその後ろに進めて、体を左にひらくと同時に、右手を頭上へ上げ、刃先を後ろにし、右鑓で受け流して面を打ち、打太刀の二の腕を押えて腕の自由を制すると同時に、右拳を右腰にとり、刃先を右斜め下に向け、剣先を咽喉部につけて残心を示す。

注 (1) 関節よりやや上部を上から押さえて、腕の自由を制す。

その後、打太刀は左足から、仕太刀は右足から相中段になりながら刀を抜き合わせた位置にもどり、剣先を下げた元の位置にかえる。

足ヨリ進ミ仕太刀ノ入身トナラントスル

ル意味ニテ下段ヨリ中段トナラントスル剣形
仕太刀ハ打太刀ノ刀ヲ制シ入身トナラントス

(47) ヲ打太刀ハ脇構ニ披キ

仕太刀ノ再ヒ入身トナル(48) ヲ脇構ヨリ正

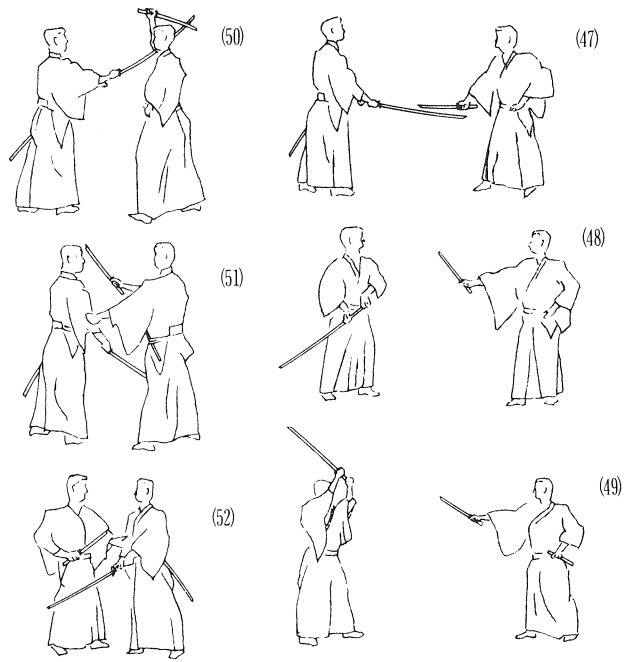
面ニ打込ム

ノ剣ヲ受ケ流シ(50)

ノ二ノ腕ヲ押ヘ(51)

剣尖ヲ示シ(52)後相暗眼トナリ(53)

剣尖ヲ下ケ元ニ復ス



(註) 双方関節ニ接スルヤ打太刀守

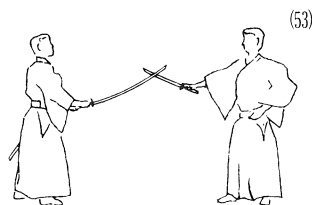
(註) 打太刀ハ左足ヨリ仕太刀ハ右足ヨリ刀ヲ抜き合せタル位置ニ帰ル

三 本 目

打太刀は中段、仕太刀は下段半身の構えで、打太刀は立会の間合から、右足、左足と進み、次の右足を踏み出すとき、仕太刀が入身になろうとするのを中段から諸手右上段に振りかぶって、仕太刀の正面に打ち下ろす。仕太刀は、その刀をいったんすり上げて打太刀の右斜めにすり落とす。

注 (1) 立会の間合から右足、左足と進み、つぎに右足を踏み出して入身になろうとするところを正面に打ち下ろされるので、この刀をすり上げてすり落とす。

打太刀は、直ちに左足を踏み出し、仕太刀の右腕を打つ。仕太刀は左足を左斜め前に踏み出し、体を右斜めにひらくと同時に、腕に打つてくる打太刀の刀を、左鎧ですり流し、そのまま左鎧で、打太刀の鰐元にすり込み、小太刀の刃部の鋸こぎで打太刀の鰐元を押さえて、入身になり、打太刀の二の腕を押さえる。



第三本

打太刀晴眼仕太刀下段半身ノ構へ互ニ右足ヨリ進ミ

(54) 仕太刀ハ入身トナラントスルヲ打太刀ハ上段ヨリ

(註) 打太刀、立間合ヨリ右足左足ト進ミ次ニ右足ヲ踏ミ出スト同時ニ中段ヨリ上段ニ立ル

仕太刀ノ正面ヲ打ち下ロス

仕太刀ハ其劍ヲ右へ摺り落ス (55) (56) (註) 一旦構り上げ打太刀ノ右斜ニ振り落ス ヲ打

太刀ハ直ニ仕太刀ノ右腕ヲ打ツ (註) 左足ヲ踏ミ出シテ仕太刀ノ右腕ヲ切ル 仕太刀

ハ左足ヲ左斜ニ踏ミ込ムト同時ニ小太刀ノ鰐元ニテ

打太刀ノ鰐元ヲ押へ (註) 仕太刀ハ左足ヲ斜左前ニ踏ミ出シ体ヲ斜右ニ転スルト同時ニ腕ニ切來ル打太刀ノ刀ヲ左鎧(産裏)ヲ以テすり流シ

入身トナリ打太刀ノ二ノ腕ヲ押

へテ (57) 二三歩進ミ (註) 腕節ノヒラキヲ横ヨリ制シ打太刀引テ仕太刀ノノマ、攻ム 劍尖ヲ咽喉部ニ

着ケ (58) 後晴眼トナリ (59) (註) 打太刀ハ右足ヨリ仕太刀ハ左足ヨリ打太刀ヲ抜き合シタル位置ニ掃リ 劍尖ヲ

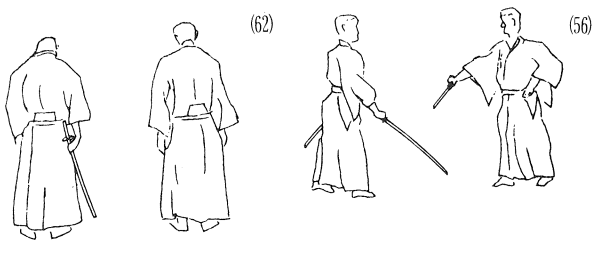
下ケ元ニ復ス (註) 此場合踏器シテ互ニ刀ヲ納メ立会ノ間合ニ戻リ立礼ニ終ル

注 (1) 関節よりやや上部をやや横より押さえ腕の自由を制する。

打太刀がひくので、仕太刀はそのまま攻めて、二三歩進み右拳を右腰にとり、刃先を右斜め下に向けて、剣先を咽喉部につけ、残心を示す。そのあと、打太刀は右足から仕太刀は左足から相中段になりながら刀を抜き合わせた位置にもどる。

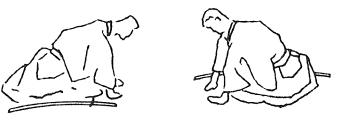
この場合、小太刀の形が終わるので、蹲踞して互いに刀を納めて立会の間合にかえり、立礼⁽¹⁾をして終わる。

注 (1) 互いの礼、上座の礼が終わると、最初の下座の位置で座礼をして退場する。



(62)

(56)



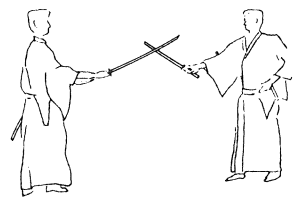
(63)



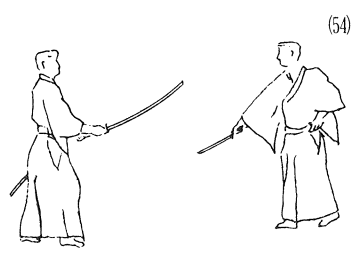
(57)



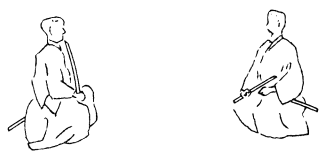
(58)



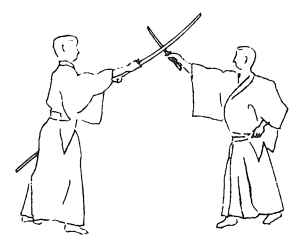
(59)



(54)



(60)



(55)



(61)

後記

この日本剣道形の解説書は、左記の普及委員会・審議員の先生方が、精根を込めて作成されたものであります。しかし、決定版ではありませんから、今後、更に研究した結果（原本の趣旨を尊重し、改正することなく）問題点があれば、修正することもあり得ます。その時は、更に理解を深めるため、写真又は絵などを挿入することも考えています。

昭和五十六年十二月七日

財団法人 全日本剣道連盟

専務理事 齋村龍雄

解説書作成に関係した方がた

審議員

堀口清

小川忠太郎

佐藤貞雄

小島主

大野操一郎

長谷川寿

中倉清

中野八十二

伊藤雅二

重岡昇

小沢武

紙本栄一

小笠原三郎

松本敏夫

太田義人

和田金次

三沢正

専務理事○齋村龍雄

普及委員会

委員長○佐藤顕

委員 中倉清

瀧沢光三

西沢善延

和田金次

○重岡昇

小沢武次郎

高橋要

大沢衛

時政鉄之助

佐伯太郎

小森園正雄

○井坂賢一郎

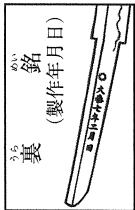
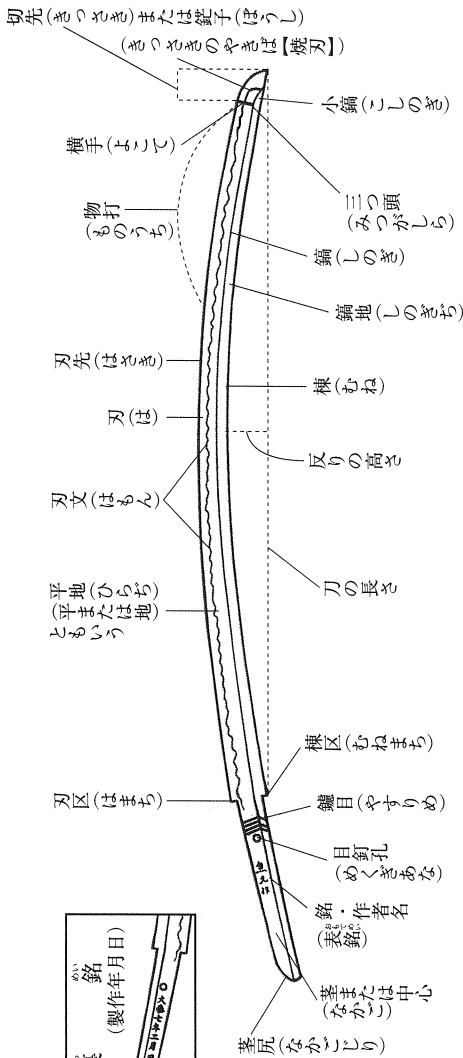
大西友次

森島健男

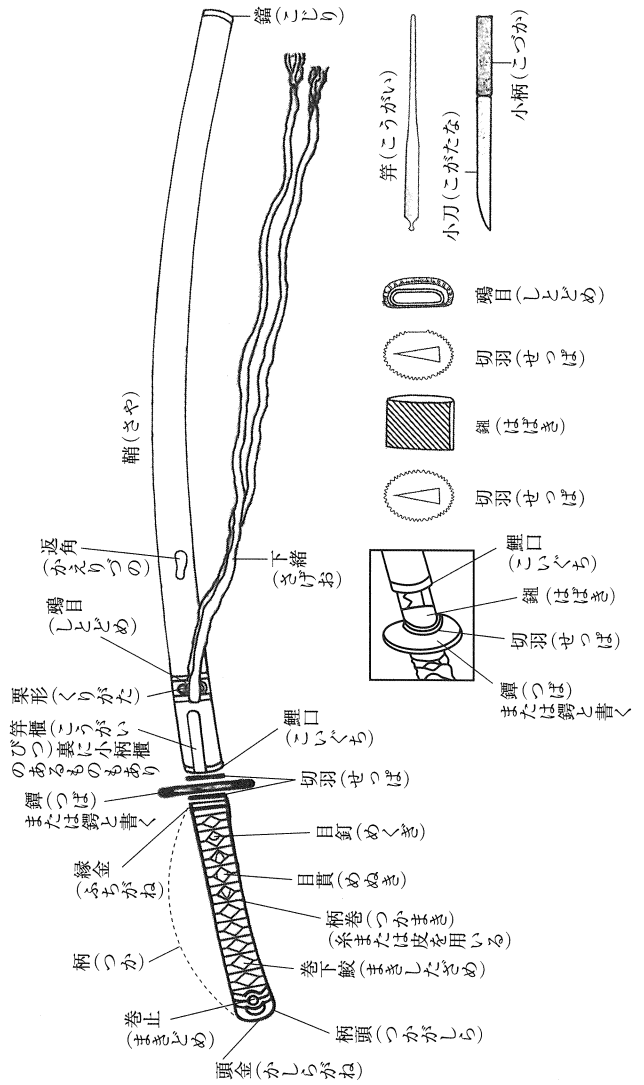
（○印の方は小委員会委員）

日本刀および拵の各部名称

刀身 (打刀)



拵 (打刀拵)



剣道形の指導上の留意点

財団法人 全日本剣道連盟

○形に対する心得

- 一、日本剣道形解説書を熟読、精通して理法と技能を体得させる。
- 二、立会いの所作及び刀の取扱いを適切に行い、特に小太刀の置き方に留意させる。
- 三、五つの構え及び小太刀の形においては、半身の構え、入身の所作を自得させる。
- 四、打太刀(師の位)、仕太刀(弟子の位)の関係を理解して、呼吸を合わせ、原則として仕太刀が打太刀より先に始動しないようにさせる。
- 五、打突の原形を自得して、充実した気迫をもって行わせる。
- 六、間合に接した時、太刀の形では機を見て打つとあり、小太刀の形においては、入身になろうとするところを打つので、その理合をわかまさせさせる。
- 七、打突したら、後ろ足を残さず前足に伴って引きつけるようにさせる。
- 八、足の運びは、原則として前進する時は前足から、後退する時は後ろ足から動作を起こさせる。
- 九、足さばきはすり足で行い、音を立てないように注意させる。
- 十、技に応じて、打突の緩急強弱を心得て、一拍子で行わせる。
- 十一、太刀を振りかぶる度合は、両腕の間から相手の全

体が見えるぐらいまで上げ、剣先が両拳^{こぶし}より下がらないようにさせる。

十二、打太刀は一足一刀の間合から技を出し、仕太刀は打突したら物打が打突部位に確実に届くよう、気迫をこめて打ち下ろさせる。

十三、仕太刀は打突後、十分な気位で残心を示すよう注意させる。

十四、打太刀は仕太刀の十分な残心を見届けてから、次の動作を起こすようにさせる。

十五、呼吸は構える時吸気し、前進する時は丹田に気迫をこめ、呼気の勢いで打突させる。

十六、形の実施中は、初めの座礼から終わりの座礼まで、特に構えを解いて後退する時も、気分をゆるめず、始終充実した気迫で行わせる。

○太刀の形

一本目

一、打太刀は打ち下ろす時、反動をつけて打ち下ろさないうようにさせる。

二、仕太刀は、剣先が下がらないように剣先の方向に抜かせる。

三、打太刀は、大技に下段の高さまで打ち下ろすので、打ち下ろしたら上体はやや前がかりになり、そのまま二歩引き、中段になりながら上体を起こさせる。

二本目

一、打太刀は仕太刀の右小手を正しく打ち、下まで打ち下ろさず、右小手の位置よりわずかに低く打たせる。

二、仕太刀は打太刀の刀を抜いたら、上段からまっすぐ打ち下ろし、斜め打ちにならぬようにさせる。

三本目

- 一、打太刀は的確に水月を突き、手もとが上がらぬように注意させる。
- 二、仕太刀は突き返したら、更に突きの氣勢で位詰めに進むのであつて、突くのではないから、この時剣先は突き出さぬようにさせる。
- 三、仕太刀がやや早く位詰めに進み、剣先を顔の中心につけた後、元の位置にもどる時は、打太刀の始動と呼吸を合わせて引き始めさせる。

四本目

- 一、双方共に遠間の面の相打ちであるから、十分な氣勢をこめ、面打ちの原形で切り結び、気位は五分であることを理解させる。
- 二、仕太刀が打太刀の突くはなを巻き返すので、打太刀の upper body はやや前がかりとなる。

五本目

- 一、打太刀が打ち下ろす時は特に十分踏み込んで大技に正面を目がけて打ち、仕太刀の刀を目がけて打ち下ろさせないようにする。
- 二、仕太刀は頭上ですり上げ、一拍子に正面を打ち、すり上げた時に剣先が下がらぬようにさせる。

六本目

- 一、相中段となり、打太刀は小技で正しく右小手を打たせる。
- 二、仕太刀も小技で、鎬うしろですり上げさせる。

七本目

- 一、打太刀は氣勢をこめて胸部を正しく突かせる。
- 二、仕太刀も相突きの氣勢で支え、その時の気位は双方五分であることを理解させる。

- 三、打太刀は正面に打ち込む時はまっすぐに踏み出し、

右斜め前に踏み出さぬように注意させる。なお打太刀は「ヤー」の掛声で正面を打ち、仕太刀は「トー」の掛声で右胴を打つように指導する。

- 四、打太刀は捨て身で打ち込むので、上体はやや前がかりとなる。

○小太刀の形

一本目

- 一、仕太刀は受け流すとき、手首を柔らかくし、鎬の使い方、体のひらき方に注意させる。その際特に体がひらきすぎないように注意させる。

- 二、仕太刀は拳を頭より高く上げて受け流すよう、特に注意させる。(二本目も同じ)

- 三、仕太刀は正面を打って反射的に上段にとらず、決めた後残心を示させる。

二本目

- 一、打太刀は一拍子に脇構えから正しく上段に振りかぶり、まっすぐに打ち下ろし、斜め打ちにならぬように注意させる。

- 二、仕太刀は残心をとる時に、殊更に体を進めて接近しないようにさせる。

三本目

- 一、打太刀は三步目を踏み出すと同時に、「ヤー」の掛声で正しく正面を打たせる。

- 二、仕太刀は、すり流して、「トー」の掛声ですり込み、手首の使い方に注意させる。

昭和五十九年六月二十六日

日本剣道形審査上の着眼点

財団法人 全日本剣道連盟

- 一、立会前後の作法、立会の所作、刀の取扱いを適切に行っているか。
- 二、五つの構え、小太刀の形における半身の構え、入身の所作を正しく行っているか。
- 三、目付け、呼吸法等を心得、終始充実した氣勢、氣迫をもって合気で行い、段位にふさわしい迫真性、重厚性が見受けられるか。
- 四、打太刀、仕太刀の関係を理解し、原則として仕太刀は打太刀に従って始動しているか。
- 五、太刀の形においては、「機を見て」小太刀の形においては、「入身になろうとするところを」とある打突の時機は適切であるか。
- 六、各本ごとの理合を熟知し、技に応じた打突の度合い、緩急強弱を心得一拍子で行っているか。
- 七、打太刀は、一足一刀の間合から打突部位を打突し、仕太刀は物打で打突部位を確実に打突しているか。
- 八、太刀を振りかぶる度合いを心得、振りかぶり過ぎて剣先が両拳の高さより下ってはいないか。
- 九、足さばきはすり足で行い、打突した時、後ろ足を残さず前足に伴ってひきつけているか。
- 十、仕太刀は打突後、十分な氣位で、残心を示しているか。
打太刀は仕太刀の十分な残心を見届けてから始動しているか。

昭和六十年六月二十六日

太刀の形

	打 太 刀	仕 太 刀
一本目	<p>一、諸手左上段から、反動をつけることなく、仕太刀の柄もろとも正面を打ち、剣先は下段の構えよりやや低く打ち下ろしているか。</p>	<p>一、諸手右上段に構え、打太刀の剣先を、体を後ろにひくと同時に諸手も剣先の方にひいて抜き、正しく正面を打っているか。</p>
二本目	<p>一、中段の構えから大技で正しく仕太刀の右小手を打ち、右小手の位置よりわずかに低く打っているか。</p>	<p>一、打太刀の右小手に対して、左斜め後ろにひくと同時に刀の下で半円をえがく気持で抜き、大技で正しく右小手を打っているか。</p>
三本目	<p>一、下段の構えから気争いで中段の構えとなり、刃先を少し右に向け、鎬ですり込み仕太刀の水月を適確に突いているか。</p> <p>二、仕太刀の萎やし入れ突き、及び位詰を左自然体、右自然体となつて、物打の鎬で押さえ、剣先は咽喉部につけているか。</p>	<p>二、突き返した後、更に突きの氣勢で、剣先を突き出すことなく、位詰に進んでいるか。</p>
四本目	<p>一、八相の構えから、一拍子で諸手左上段に変化し、仕太刀の正面の高さまで打ち下ろし、切結んで相打ちとなっているか。</p> <p>二、鎬を削るようにして相中段、一足一刀の間合となり、刃先を少し右に向け仕太刀の右肺を突いているか。</p>	<p>一、脇構えから、一拍子で諸手左上段に変化し、打太刀の正面の高さまで打ち下ろし切り結んで相打ちとなり、気位は五分となっているか。</p> <p>二、打太刀が突いてくるはなを左拳を頭上へ上げ、刃先を後ろに向けて巻き返し、正面を打っているか。</p> <p>三、充実した気位で残心を示しながら相中段になっているか。</p>

<p>五本目</p> <p>一、諸手左上段から仕太刀の顎まで切り下げる心持ちで諸手を十分伸ばして正しく正面に打ち下ろしているか。</p> <p>二、すり上げられた刀は自然に刃先をやや左にし、右斜め下に下がっているか。</p>	<p>六本目</p> <p>一、仕太刀の下段から中段えの変化に應ずる所作は適切であるか。</p> <p>二、諸手左上段から中段となり、機を見て小技で仕太刀の右小手を正しく打っているか。</p> <p>三、右小手を打たれた後、左斜め後ろに大きくひいているか。</p>	<p>一、打太刀の刀を左鑷で頭上ですり上げ一拍子に正面を打っているか。</p> <p>二、残心を示す時、右足をひきつつ剣先を打太刀の顔の中心につけながら諸手左上段に構えているか。</p> <p>一、下段から中段を攻め、更に諸手左上段に対して攻め進む所作は適切であるか。</p>	<p>七本目</p> <p>一、刃先をやや右斜め下に向け鑷ですり込みながら正しく胸部を突いているか。</p> <p>二、仕太刀に支えられた時の物打の高さはほぼ肩の高さとなっているか。</p>	<p>二、右鑷で小さくすり上げ、一拍子で正しく打太刀の右小手を打っているか。</p> <p>三、諸手左上段で残心を示した後、右足から刀を抜き合わせた位置にもどっているか。</p> <p>一、突の氣勢で刃先を左斜め下に向け、物打の鑷で打太刀の刀を支え気位は五分になっているか。</p> <p>二、目付をはなすことなく、右足を右前にひらき、左足を踏み出して、体をすれ違いながら右胴を打ち、右足を踏み出し、左足の右斜め前に軽く右膝をついて、左膝を立て、諸手は十分伸ばしているか。</p> <p>三、胴を打ち終ってから節度をつけて脇構えに構えて残心を示しているか。</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

小太刀の形

	打 太 刀	仕 太 刀
<p>一本目</p>	<p>一、諸手左上段から反動をつけることなく、正しく正面に打ち下ろしているか。</p>	<p>一、体を右斜め前にひらき、右手を頭上に上げ左鑷で受け流しているか。</p>
<p>二本目</p>	<p>一、一拍子に脇構えから正しく諸手左上段に振りかぶり、まっすぐに正面に打ち下ろしているか。</p>	<p>二、確実に正面を打ち、反射的でなく、決めてから上段に構えて残心を示しているか。</p> <p>一、体を左斜め前にひらき、右手を頭上に上げ、右鑷で受け流しているか。</p>
<p>三本目</p>	<p>一、三歩目を踏み出すと同時に一拍子で仕太刀の正面を打っているか。</p>	<p>二、確実に面を打ち、決めてから残心の所作を行なっているか。</p> <p>一、正面打ちに対するすり上げ、すり落とし、右胴打ちに對するすり流しすり込みの所作が正しく出来ているか。</p> <p>二、残心を示した後、左足から刀を抜き合せた位置にもどっているか。</p>

作成の経緯

財団法人 全日本剣道連盟

1. 昭和五十五年二月八日〜九日に開催された高段者研究会の日本剣道形の研究討議の過程で、齋村専務理事が次のように集約的の回答をしている。

「昭和八年の形の原本は、このままでは現在の青少年には理解しにくいと思われるので、子供にもよくわかるような現代文の解説書を作りたい、そのために、別の委員会を設ける。……以下略」

(全剣連広報第40号)

注 昭和五十六年二月の高段者研究会に原案を提示する際の齋村専務理事の経過説明の一部

(全剣連広報第44号)

「昨年の高段者研究会の際、六・七段審査会で剣道形が相応にできない者が多かった。その理由としては、受審者がテキストとしているのは、旧武徳会制定の原本であり、原文が理解しにくい点があるのではないかと思われた。……以下略」

この回答に基づいて、当時の佐藤顕普及委員長を中心として、小委員会が設けられ、起案に着手することになった。

2. 作成の趣旨は前記齋村専務理事の回答の内容が根幹であるが、種々の意見を総合して

(1) 剣道形修練の障害の一つと思われる、難解となつ

た原本をやさしい文体に書き改めるとともに、説明不十分なところを全剣連の見解として補足し、理解しやすいようにする。

(2) 明らかに誤植と思われる点については、原本を訂正することなく解釈を統一して修練の便をはかる。

注 昭和五十二年二月五日〜六日、高段者研究会形分科会の申し合わせ

「昭和八年加註増補の剣道形原本の誤植について、明らかに誤植と認められるものが相当あるが、原本尊重の意味で訂正せず、解釈を一本化する。」

(全剣連広報第25号)

以上の二点が骨子である。

(3) なお、解説書は、飽くまでも全日本剣道連盟の統一見解として作成するものであるが、勉めて原本に親しみ、その研究に取り組んでもらいたいことを、特に付記した。それは原本の研究によって、さらによりよい見解の生まれることが期待されるからである。

齋村専務理事の後記は、次のように誌されて、これを物語っている。

「……決定版ではありませんから、今後、更に研究した結果（原本の趣旨を尊重し、改正することなく）問題点があれば、修正することもあり得ます。……略……」

3. 作成の趣旨に副って起案するにあたり、予め十項目の「起案の方針」を樹てた。これが制定されるとともに解説の要領となつた。

(1) 原本については、昭和四十一年七月の第一回講習会のための研究会の申し合わせに従った。

注 昭和四十一年七月三日～四日、全剣連主催審判法、形研究会において

「形においては、大日本武徳会が昭和八年五月に加註増補した原本をもとにして、原本に忠実に実施する。」 (重岡 昇 全著、日本剣道形解説)

(2) 過去の研究会等で統一見解として示されたものは、そのまま、原案に組み入れる。ただし、

(ア) 「三本目の胸部をすべて水月とすること」については、最終的に審議会の審議に諮るところとなった。

(イ) 打太刀、仕太刀の位置関係について

● 従来正面に向かって左側を打太刀、右側を仕太刀とされていたのだが、昭和四十二年九月の研究会で、これが反対となった。宮中の礼法に則つての申し合わせであった。

(重岡 昇 著、日本剣道形解説)

● これが、昭和五十二年二月の高段者研究会形分科会で、「必ずしも打太刀を、上座に向かって右側に限定する必要はない」との申し合わせになったので、これを原案にとり入れた。

(全剣連広報第25号)

(3) 従来慣習的に伝承してきたものの確認と、所作の説明不十分で、所作がまちまちになるおそれのあるものについて、新しく見解を示すことにした。

(4) 構えの名称の統一については、すでに、大正元年制定時の委員会において

(ア) 中山委員 (注、中山博道範士…当時教士) が「……略……相晴眼ハ前二相中段トアリ、是等ハ一定スル方宣シト思フ」と意見を述べておられるが、原案賛成多数で否決されている。

(大日本武徳会機関紙写し)

(イ) 原典とも言うべき流派において、それぞれに重要な意味があったことはわかるが昭和八年の原本を見ると、本文には晴眼、注には中段と表現されている点から、全剣連の見解としては、すべて中段と解釈することにし、上段も同様に考えることにした。なお、原本の注が中段であったことについて、左の注でその意がうかがえる。

注 昭和八年五月の加註増補委員会において

「この会議に於て、動作を本文注釈を別にしない体制をとり度き希望ありしも、本文は改む可きに非ずとの委員長田所美治氏の所説にて、止むを得ず加註の萬全を期したり……」

(津崎兼敬 速記録……当時幹事)

(5) 太刀の形七本の「説明」については、従来からの申し合わせを勘案して、原本原文のまま掲載する。

注① 昭和四十一年七月の研究会において

原本にある、太刀の形の先後の説明については、いろいろ論議の結果、この際は未解決のまま、これにはふれないことにした。

(重岡 昇 著、日本剣道形解説)

注② 大正六年八月加註の時「この際も形説明に就ては審議されざるを遺憾とす」

昭和八年加註増補時「……形説明の審議されざる

ままにて終了されたり」

(津崎兼敬 速記録)

4. 以上のような作成の趣旨と起案の方針に基づき、原案の作成を始め、昭和五十五年九月第一回小委員会を開催、以来小委員会と普及委員会で検討修正をかさね、さらに高段者研究会に提示して意見を求め、これをまた委員会で検討し、最終的に審議会に諮ったのち、諸機関の議決を経て制定されたものである。

昭和六十年十一月二十七日

解説書のできるまで

財団法人 全日本剣道連盟

原本付
の解説書

<p>2</p> <p>1. 立会前後の作法</p> <p>(1) 天覧、台覧の場合は……について 注の存廃について、天覧、台覧の言葉を除外して、今日的な最高の礼式を規定する等、種々の意見が出たが、結局原本に従って存置することになった。</p> <p>(2) 上座と相互の礼について 原本の敬礼と礼との区別をなくして、礼に統一し、それぞれ具体的に要領を示した。</p> <p>(3) 小太刀の所作「軽ク握ル」について 起案の当初注で「握るとは押さえる意味である」としていたが、具体的に「押さえる」と表現することになった。</p>	<p>4</p> <p>2. 刀</p> <p>(1) 「正式ニハ白刃（註）刃引ヲ用フ」について 白刃は真剣（木剣に対して）と改めていたが、剣を刀に統一されることになった（審議会）ために「刀（刃引）を用いる」とした。</p>
<p>5</p> <p>(2) 木刀の寸法について 起案当初「メートル法」で表現したが、刀の寸法は尺貫法で示す方が調和がよいとのことで尺貫法で表すこととした。 なお、「鐔、切羽ノ間五分」は現在の木刀の構造上説明がむずかしいので削除した。</p> <p>(3) 太刀、小太刀について 刀剣学上、剣道形の太刀、小太刀の名称に問題があるとの説もあるので、剣道形では、単純に太刀とは大刀、小太刀とは小刀のことであると説明した。</p>	<p>3. 太刀の形七本について 原本にはないので、入れない方がよいとの意見もあったが、「小太刀の形三本」の見出しとの関係もあり、入れることにした。</p> <p>4. 一本目</p> <p>(1) 打太刀の正面打ちの要領について 太刀五本目の打ち方と区別して、具体的に打ち方</p>

の要領を示すべきだとの意見があり、注(1)で「柄もろともに……」という気構えと、「打ち下ろした剣先は……」と切り下げた剣先の位置を示して、真二ツに切り下げることが示した。

(2) 継ぎ足と送り足について

継ぎ足とは現在の送り足であるとの見解をとった。

(3) 顔の中心（原本 面ノ中心）について

顔の中心とは、寸田のことで、両眉の間、両眼の間の二説があるが、両眼の間とした。

なお、「寸田」を用語として残すべきだとの意見もあつたが削除することにした。

(4) 「左足を踏み出しながら……」について

「左足を踏み出して、諸手左上段に振りかぶり」を「……踏み出しながら……」として手足の連動をより明確にした。

5. 二本目

(1) 打太刀の小手打ちについて

一般に小手の位置より低く打ちすぎるので、注(1)で「……右小手の位置より、わずかに低く打つ」とした。

(2) 残心について

二本目の残心は、原本に示されていないが、一本目「注(3)」残心についての精神と昭和五十二年二月の高段者研究会の申し合わせに従って「注(1)」のように表現した。

6. 三本目

(1) 仕太刀の入れ突きに突き返す「胸部」について

打太刀が仕太刀の胸部を突く場合の注に「水月」となっているので、これに準じて、水月とすべきである。また、注がないものは胸部でよいとの意見に分かれたが、審議会の決定により、原本のとおり水月と胸部に分けることになった。

(2) 位詰の二、三步について

位詰の二、三步を三步に限定する意見があつたが、審議会において原本どおりにすることになった。

(3) 刀を抜き合わせた位置にもどる要領について

仕太刀位詰に進んだ後、打太刀、仕太刀が刀を抜き合わせた位置にもどる要領を示した方がよいとの意見もあつたが、解説書のとおりにした。

7・四本目

(1) 右肺について

「右の肺」とする意見もあったが、原本どおり「右肺」とした。

(2) 巻き返しについて

巻き返しが、全般に手元が低くなるので、原本注「大キク」を解説書本文に入れるとともに、さらに「左拳を頭上に上げると同時に……」と注を加えた。

(3) 残心について

四本目の残心については、二本目と同じように原本には明記されていないが、二本目の趣旨に基づき、形に表さない残心として、所作を具体的に解説した。

8・構えの説明

(1) 八相の構えの「構え方」について

当初「注」として入れていたが、脇構えにならない本文中に加えることとした。

なお、「やや半身に構える」としていたのを削除した。

9・五本目

(1) 「仕太刀は中段で」の剣先のつけ方について

「上段に対する中段なので剣先をやや高くつける」と小太刀の構え方の注にならっていたが、具体的に部位を示した方がよいとの意見で「左拳につける」となった。

なお、刃先は、「真下」「平正眼」の両説もあったが、審議会で論議の末、真を削除して「下」ということになった。

(2) 打太刀の正面の打ち方について

一本目との打ち方の違いを示す必要があるとの意見で、「顎まで切り下げる……」とした。

(3) 鎧の差表、差裏について

用語として残すべきだとの意見もあり、注を加えて残す考え方であったが、結論として削除することになった。

(4) 「すり上げ」について

(ア)「すり上げ面が、払い面、抜き面にならないように……」と注をしていたが、抜き面を削り、一般に陥りやすい「払い面」だけにした。

(イ)「すり上げ」の接点についても「頭上ですり上げる」と注を加えるべきだとの意見もあったが

- (4) 「打太刀は剣先を下げて……残心を示す」について
 「払い小手」だけを注として残した。
- (3) 「すり上げ」について
 「すり上げが、払い小手、応じ小手にならないように注意する」と注を加えていたが、特に、多い

10・六本目

- (1) 九歩の立ち間において仕太刀の下段に対応して、打太刀が中段の剣先を下げることに
 下段に対応して、打太刀も中段の剣先を下げるべきではないかとの意見もあったが、その必要はないとされた。
- (2) 打太刀が諸手左上段に振りかぶったとき、仕太刀が
 胸、咽喉部等の意見があったが、結論として「左拳」になった。
- (3) 「すり上げ」について
 「すり上げが、払い小手、応じ小手にならないように注意する」と注を加えていたが、特に、多い
- (4) 「打太刀は剣先を下げて……残心を示す」について
 「払い小手」だけを注として残した。
- (5) 「右足をひきながら」について
 仕太刀残心を示す場合「右足をひいて……」としていたが「……ひきながら……」として手足の連動を明確にした。

11・七本目

- (1) 打太刀の突きについて
 一般に打太刀の突きが高くなるので、胸部を水月にしたかどうかの意見もあったが、原本どおりとした。
- (2) 仕太刀が胴を打つ場合の足さばきについて
 原本「右足ヲ右ニ」は右横か、右前かについて、いろいろ論議されたが、審議会では右前との見解が示された。
- (3) 「体をすれ違いながら右胴を打つ」について
 右足を右前にひらき、左足を踏み出して、右胴が打てるか等の問題点の論議があったが審議会に諮って、原本どおりとすることになった。
- (4) 「仕太刀が十分な氣勢で立ち上がってくるので、打太刀は左足から後ろに」について
 この解説の表現では、打太刀と仕太刀の主体性に問題があるとされたが、審議会に諮った結果、表
- (ア)このとき、打太刀の刃先の方向が問題になったが、「……刃先は右斜め下……」と注を加えた。
- (イ)なお、仕太刀上段にとつて残心を示す場合、「左足を踏み出しながら……」とした。

現は解説書どおり（原本どおり）とするが、打太刀がひき起こす気持であるとの見解を示された。

12・説明について

解説書から削除すべきである、カタカナをひらがなに直して掲載する、解明すべきである等の意見があつたが、審議会で原本のまま掲載することになった。

13・小太刀一本目

(1) 「入身トナルヲ」について
用語の解釈と所作について、種々意見が出されたが、結局「入身になろうとするので」と表現することになった。

(2) 「いったんその場で相中段になつてから……」について
従来からの伝承所作を確認する意味で、本文と注に入れた。

14・小太刀二本目

(1) 「関節ノ上ヲ上ヨリ押へ」について

関節の上とは、①関節そのものの上である、②関

15・小太刀三本目

節より上の部分である、との意見があつたが、「関節よりやや上部を……」となった。

(2) 仕太刀の残心の示し方について

剣先を咽喉部につける具体的な所作が原本に示されていないので、これを示す必要があるとの意見で、従来伝承されてきた所作「右拳を右腰にとり、刃先を右斜め下に向け」を本文中に加えることにした。

(1) 仕太刀が打太刀の刀をすり落とす方向について
原本注に「……右斜メニ……」となっているが、当初「右斜め後方に」との見解をとっていたが、原本どおり「右斜め」とした。

(2) 「二三歩進み」について
「三步」と限定する意見もあつたが、審議会で原本どおりとする見解が示された。

(3) 注(1)「関節より、やや上部をやや横より押さえ腕の自由を制する」について

制する場合に、左右の手で逆にとるとの意見もあり、また、この逆のとり方にも、ねじる方向が違ふ等いろいろ論議されたが、審議会で諮つた結果、

表現は原本どおりとしてツボを押さえ自由を制するとの見解となった。

(4) 刀を抜き合わせた位置にもどる、仕太刀の足運び(左足から) について

誤植と思われるので「右足から」とすべきであるとの意見もあつたが、審議会の審議で原本どおりとなった。

16・その他

(1) 剣と刀について

原本では、本文には剣、注には刀が使用されているので、一応「案」としては原本に従い、最終的に審議会に諮ることになり、結果刀に統一された。

(2) 用語の解説について

当初は注を加える方針で進めており、また、研究会でも解説の要望があつたが、根拠とすべき原典に適当なものが見当らない等の事由で、全剣連としての見解を示さない(解説書に入れない)ことにした。

(3) 名称の変遷

(ア) 全日本剣道連盟剣道形(解説) から

(イ) 日本剣道形(解説) に、ついで

(ウ) 日本剣道形現代文解説書 となり、最終的に
(エ) 日本剣道形解説書 となった。

昭和六十年十一月二十七日

解説書にもとづく意志統一

財団法人 全日本剣道連盟

<small>原本付 の解説書</small>	提案事項	統一見解
3	<p>1. 提案者</p> <p>(1) 立会</p> <p>刀を左腰に差し、左手を鰐元に添えて親指を鰐にかける。</p> <p>▲この場合、親指を鰐にかけて「鯉口を切る」のか</p> <p>(2) 一本目</p> <p>打太刀は機を見て、右足を踏み出し、仕太刀の正面を打つ。</p> <p>▲この場合、打太刀の目付けは、仕太刀から外れるか</p> <p>(3) 二、四本目と六本目の残心の所作について。</p> <p>二、四本目「十分な気位で残心を示しながら、相中段になりつつ」刀を抜き合せた……</p> <p>六本目「打太刀、仕太刀ともに右足から……」</p> <p>▲二、四本目と六本目の残心の所作に先後の差異があるか</p> <p>(4) 八相の構え</p> <p>諸手左上段の構えから、そのまま右拳を右肩のあたりまで下ろした形で、……</p> <p>▲このとき、左拳の位置は</p>	<p>親指は鰐にかけるが、鯉口は切らない。</p> <p>目付けは外さない。</p> <p>先後の差異はない。(始動は打太刀)</p> <p>ほぼ、正中線上</p>
5	7	9
9	12	9

10	12	15	16	17
(5) 五本目	(6) 六本目	(7) 小太刀、一本目	(8) 小太刀、二本目	(9) 小太刀、三本目
注(1) 剣先を左拳につけ、刃先は下を向く。	打太刀は剣先を下げて、左足から左斜め後ろに大きくひくので、	中段半身の構え、注(1) 剣先をやや高く構える。	中段半身の構え、注(1) 剣先をやや低く構える。	仕太刀の下段半身の構えに対して、打太刀応じて中段の剣先を下げるか
▲刃先は「下」の解釈について	▲このとき、打太刀は仕太刀に「正対」するようにひくか	▲剣先のつけどころ	▲剣先のつけどころ	▲仕太刀、打太刀を右斜めにすり落としたとき、仕太刀の剣先は打太刀の体を外れるか
審議会決定のとおり「下」と解する。	正対しない。	顔の中心	胸部	外れる。
下	下	下	下	下
斜め右↓下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下
下	下	下	下	下

